

『探偵は月夜に恋をする』

著：遠野春日

ill：タカツキノボル

「出ませんか」

雪彦がそう言って、スツールから下りる。

「今夜は月がとても綺麗です」

外を歩こうと誘っているらしい。

直哉も頷いてカウンターを離れた。

馴染みのフロアマネージャーが「ありがとうございました」と言って二人をレジに案内する。

レジでは直哉が財布を取り出す前に、雪彦のほうが先に胸ポケットからゴールドのクレジットカードを出して、キャッシャー担当者に手渡してしまった。

「こら。……まいったな、きみは」

「おいしいお酒でした」

雪彦は素晴らしく綺麗に微笑んでから、悪(いた)戯(ずら)好きな少年のような瞳で直哉を見る。

「こちらにサインをお願いします」

キャッシャーに促されて、雪彦は内ポケットに差していた細身のボールペンで、はっきりと自分の本名をサインした。もちろん直哉が見ているのを承知してのことだろう。

不敵で肝の据わった男だな、と思う。

直哉はつい顔がニヤリとしてくるのを止められなかった。

まったくのところ、雪彦は直哉の好みで、ほとんど理想的ですらあった。多分、直哉はこんな相手とめぐり逢えるのを待っていたのかもしれない。

「以前はどこの優良企業に勤めていたんだ、杉本雪彦？」

肩を並べて広々としたフロアを横切りながら、直哉は唐突な質問をした。

それでも雪彦は平然としたまま、眉の一つも動かさなかった。

「なぜですか？」

「水商売勤めの人間がゴールドカードを持っているとは考えられない」

「それはあまりにもものの側面しか見ていない考え方です。これは家族カードかもしれませんが、たとえば、僕の父が政治家だったり、どこかの会社役員だったりするとしたらどうですか。腑甲斐ない遊び人のバカ息子に甘い父が、大学時代の名残のカードを取り消さずにそのままにしているというわけです」

「そうなのか？」

「さあ」

雪彦はとても楽しそうだった。

「そういう可能性もあると指摘してあげただけです、直哉さん」

こいつ、と思った。

その生意気かわいい唇を、今すぐに塞いでしまいたい衝動に駆られる。

なにも教えてくれなくてもいい。

そのかわりに、自分の体で雪彦のことを知り尽くしてやりたい。気持ちよくされて泣く声も、肌の匂いも、いくときに上げる切羽詰まった声も、全部知りたい。その場でどんなに哀願してきても絶対に気のすむまでは許してやらない。そして二度とほかの男の前ではネクタイを解かないと誓わせてやりたい。強烈な所有欲は、激しい恋をしているときにつきものの感情だ。

「直哉さん」

雪彦が直哉の肩にそっと指を掛けて、空を振り仰ぐ。

ちょうど二人はホテルの車寄せをぐるりと回って歩いていた。

「ほとんど満月に見えるでしょう？」

確かに今夜は雲が少ない上にほぼ満月になった月の明かりが際立つ、綺麗な月夜である。

「綺麗だな」

直哉は低く呟いた。

けれど、本当は月などよりも、隣を歩く男のほうがもっと気になっている。

綺麗なのは月よりもあんただよ、と言ってやりたいところだったのだ。

大通りを駅の方角、つまり街の中心に向かって歩いていく間に、どちらもひどく口数が減っていた。

黙っていても息苦しさや居心地の悪さを感じない。

空に懸かっている月を眺めながら、このままどこまでも二人で並んで歩いていた気分だ。

これからどこに行くのかとか、何がしたいのかとか、互いに聞こうとはしなかった。聞く必要を感じていなかった。

商業ビルが建ち並ぶ市街地の一面に、広大な敷地面積を取って緑地公園が造られている。

二人は足の向くままに、自然とその公園に入っていった。

朝方や夕刻になると、近くの社会人野球チームの人たちが、ここでランニングをしたり、柔軟体操をしたりしている光景が見られる。九時近くになった今はそんな人々の姿もなく、公園の中はしんとしていた。ずっと奥まで入り込んでいく間には、明かりの下のベンチに座って額をくっつけ合ったり、肩を抱き合ったりしてじっとしているカップルが三組ほどいるのを見たが、皆自分のパートナーのことしか目に入っていないようだった。

「雪彦」

直哉は空いているベンチを見つけたので、軽く雪彦の腕を引いた。

だが雪彦はまだ直哉を焦らして楽しみたいのか、意地悪く首を振り、逆に直哉の手首を掴むと、

「もう少し歩きましょう」

と促した。

完全に雪彦に主導権を握られている。

仕方なく直哉は雪彦の気のすむまで付き合うことにした。惚れた弱みなのか、相手が同性だからという戸惑いがあるためなのか、これまでのようにスマートな行動がなかなかとれない。そんな自分に苛立ってもいた。

周囲に大木が多くなってくる。

この辺は夏場には気持ちのいい木陰になる場所だった。

空も木の葉の影に透けて見えるほどになり、月の姿は隠されている。

雪彦の歩みがゆっくりとしたものになった。

周囲にはまったく人けがない。

直哉は唐突に雪彦の二の腕を掴んで引き寄せると、驚いてこちらを振り向いた彼の細い顎を掴んで少し仰向けさせ、悲鳴をあげる隙も与えずに唇を塞いだ。

「あ……うっ」

雪彦は少しだけ抵抗しかけたが、直哉に両腕できつく抱きしめられると、そのまま自分も直哉の背中に腕を回してきた。

これだけ体を密着させると、ずっと仄かに感じていた雪彦の纏っている香水の匂いが、ひどく官能的に感じられて、直哉の欲望をかきたてる。

「雪彦」

直哉は雪彦の唇を自分の唇でこじ開けて、たっぷりと唾液を絡ませた舌を、雪彦の口の中に滑り込ませた。

「んっ」

雪彦の舌を求めて口の中をまさぐると、躊躇いがちにではあったが、雪彦も直哉の舌に応えてくる。その仕草がなんとも初々しくて、直哉はますます深い愛情を感じてしまった。

キスをしている間、相手が男だという意識はほとんど持っていなかった。好きな人が男だろうと女だろうと、直哉にはまったく問題ではなくなっていたのだ。

舌を絡ませ合いながら、深いキスに夢中になった。

雪彦は次第にまっすぐに立っていることができなくなったようで、一、二歩ずつよろけるようにして、次第に後退っていった。その背中が、後ろにあった大木にぶつかり、そのままぐったりと体を預けてしまう。それでも直哉は雪彦を離さなかったし、キスも途切れさせなかった。

「直哉……さん」

息継ぎする合間に、雪彦が喘(あえ)ぐような声を出す。

「なに？」

直哉はようやく唇を解放してやり、雪彦の潤みきった目尻や瞼(まぶた)に宥めるようなキスをした。雪彦の頬は少し紅潮している。そこに涙が一筋だけすうっと零(こぼ)れ落ちてきたので、舌で掬って舐め取ってやった。とても綺麗だった。雪彦の瞳は、欲情したように濡れている。涙は半ば生理的なものようだった。

「僕のことが好きですか……？」

「雪彦。おまえ、肝心の場面では野暮だぞ」

直哉が意地悪く一矢報いてやると、雪彦はたちまちきまり悪そうに目を伏せた。

さっきまで直哉をいのように翻弄していた売れっ子ホストの面影はもう微塵も窺えない。

直哉は落ち着いたかなさそうに木の幹に爪を立てている雪彦の両腕を取り、凭れ掛かっていた彼の体を引き起こして自分の腕の中に抱きしめると、もう一度だけ軽いキスをした。

「行こうか」

雪彦も小さく頷く。
緑地公園の向こうには、建ったばかりの真新しいビジネスホテルが見えていた。

本文 p92～100 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>